

# 『大目乾連冥間救母變文』から見た 變文の書き換えと經典化

荒見泰史

## 第一節、前言

敦煌文獻の發見が、今日に至る人文學研究に如何に大きな影響を與えたかについて、もはやここに説明の必要はないであろう。

變文は、そうした敦煌文獻發見の最早期にとくにその重要性が注目された研究資料である。中國では文學革命以降の新たな時代の文學史觀が模索されていた時代に發見された變文は、當時に言う「國民文學」、「白話小説」の歴史の中における唐代の「俗文學」、「通俗文學」と位置づけられ、とくに注目されるようになったのである<sup>1</sup>。確かにそこには後代の語り物文學に續く講唱體という文體、その時代の風俗、人情に関する内容、言語を反映する内容が多く含まれており、今日に至ってもなお多くの研究者によって研究が進められている。

ただ、そうした變文研究の中で、しばしば見落とされる視點としては、敦煌文獻に見られる變文が、主に口頭による講唱の場などで臺本あるいは手控えとして實用されていた文獻であり、時代的な變化、あるいは講唱形態の變化、聽衆の變化などに應じたて形を變えていた、つまり狀況に應じて書き換えられ發展し續けていた「生きた文學」の軌跡である、という視點である。こうしたことは、傳世文獻の場合のように繼承の過程で規範化された文獻を研究する場合にも考慮すべきではあるが、變文研究では、敦煌という一地域で、おそらく複数回上演された時の手控えや臺本がそれぞれのバージョンとして残されている場合が有り、ごく短い時間的スパンの中でストーリーの變更まで行われたことを想定する必要まであ

<sup>1</sup>最早期の變文研究中、代表的な研究成果には以下のような數點が有る。狩野直喜氏「支那俗文學史研究の材料」(上)(下)、『藝文』第7卷第1號、第7卷第3號、1916年。青木正兒氏「敦煌遺書〈目連緣起〉〈大目乾連冥間救母變文〉及〈降魔變押座文〉に就て」、『支那學』第4卷第3號、1927年。倉石武四郎氏「目連變文紹介の後に」、『支那學』第4卷第3號、1927年。鄭振鐸氏「敦煌的俗文學」、『小説月報』第3卷、1929年。陳寅恪氏「敦煌本維摩詰經文殊師利問疾演義跋」、『歷史語言研究所集刊』第2本第1分、1930年。

る。こうしたことについては、筆者がこれまでもたびたび論じており<sup>2</sup>、すでに變文研究においては常識化していると言ってよい。

敦煌に残される寫本の中でも、そのような書換えが顕著に見られるのは、佛傳故事類と目連變文類である。佛傳故事類では、儀禮の中で読み上げられていた『八相押座文』、『悉達太子讚』などの押座文や讚文が書き換えられ、或いは講唱體の開頭の入話となり、また或いは短く切り分けられて講唱體の韻文部分として利用されていく状況を読み取ることができる<sup>3</sup>。目連變文類では敦煌寫本を通じて様々なバリエーションの目連變文が存在していたことが確認でき、例えば北京 8719 のような稿本まで見られている<sup>4</sup>。この稿本では、もともと存在していた韻文を書き換えるなどして講唱體の文體を作り上げようとする過程が明瞭に見てとれ、やはりこのような改作を経て多くの目連變文のバリエーションが成立していったことを読み解くことができるのである。そして、そのような書き換えのなかで、敦煌文獻中に講唱體變文が多く見られるようになるのが早くとも 9 世紀末、概ねが 10 世紀初頭以降のものであることもすでに明らかになっている。

ただ、そうした多く變文が實際の演出の中で書き換えられている一方で、ある一定の發展段階において、定型化、或いは經典化とも言える現象がおこっていることも見過ごしにできない。例えば、『漢將王陵變』などは各寫本間であまり差異のない變文であるが、その寫本に記載される識語がもし『漢將王陵變』の寫作年代と一致するとすれば、P.3627 に記される「天福四（939）年」と北京大學 D.188 の「辛巳（推定 981）年」という 42 年間も大きな變化がなく伝えられた事になる。本稿に扱う『大目乾連冥間救母變文』もまた、様々な目連變文が書き換えられて變化の様相を見せる中で、長い期間變化していない目連變文の一系統であるといえる。しかも、金岡照光氏などに指摘されるように、BD00876（北京 7707）のように祈願のための題記が書かれ、經典類とほぼ同様に扱われている變文も見られることも、注目しておくべきであろう<sup>5</sup>。

本稿では、舊稿までに論じてこなかった目連變文類に残された問題について、寫

<sup>2</sup>拙稿『敦煌變文寫本的研究』、中華書局、2010 年。拙稿『敦煌講唱文學寫本研究』、中華書局、2010 年。

<sup>3</sup>拙稿「從敦煌寫本中變文的改寫情況來探討五代講唱文學的演變」、『敦煌學國際研討會論文集』、174-189 頁、北京圖書館出版社、2005 年。拙著『敦煌講唱文學寫本研究』（中華書局、2010 年）に収録。

<sup>4</sup>王繼如「敦煌文獻跋語二則」『文獻』、1997 年第 4 期、249-255 頁。拙稿「敦煌文獻に見られる『目連變文』の新資料」、『東方宗教』第 103 號、61-77 頁、2004 年（加筆訂正後、拙稿『敦煌講唱文學寫本研究』（中華書局、2010 年）に収録）。

<sup>5</sup>金岡照光「變文・講經文の識語より見た作成の意圖」『敦煌の文學文獻』（講座敦煌 9）、大東出版社、1990 年、151-171 頁。

本の書き換えの状況、またその逆の定型化あるいは經典化などの角度から改めて考えてみたいと思う。

## 第二節、『大目乾連冥間救母變文』系統の現存寫本

目連變文には、『目連變文』、『目連緣起』、稿本の國家圖書館藏（北京 8719、水 8）、など、多くのバリエーションが知られている。本稿では、最も寫本點數も多く、廣く流布していたとみられる『大目乾連冥間救母變文』系統についてとくに調査してみたい。

『大目乾連冥間救母變文』寫本の情報については、拙稿にすでにたびたび紹介しているが、新たな資料の發見もあり、ここに改めて紹介し、併せて加筆訂正をしておきたい。

- (1) S.2614 R：大目乾連冥間救母變文  
首題：大目乾連冥間救母變文竝圖一卷竝序  
尾題：大目犍連變一卷  
存：421 行  
V：（敦煌各寺僧尼名簿）  
識語：貞明柒年（921 年）辛巳歲四月十六日，淨土寺學郎薛安俊寫。  
張保達文書。
- (2) P.2319 R：大目乾連冥間救母變變文  
首題：大目乾連冥間救母變文  
尾題：大目犍連變文一卷  
存：261 行  
識語：1.（首題下）其偈子，每械三兩句，後「云云」是。  
解説：この寫本では講唱體の韻文部分を數句（實際は四句が多い）程度のみ記し、その後ろに「云云」と注記して以下を省略している。韻文部分が講唱藝人などによく知られていたことからの省略と考えられる。
- (3) P.3485 R：大目乾連冥間救母變文  
首題：目連變文  
尾題：闕  
存：126 行  
V：張大慶記（以上 4 文字、2 張目と 3 張目の繼ぎ目に書かれる）

- (4) P.3107 R：大目乾連冥間救母變文一卷竝序  
首題：大目乾連冥間救母變文一卷竝序  
尾題：闕  
存：31行  
V：大目乾連變文一卷 寶護（表紙部分）、（淨土寺大祥追福設供  
伏願誓受佛敕疏）  
識語：大唐國……戊寅年（918年？）六月十六日。  
解説：題目下にもみられる「寶護」の名は、敦煌文獻中ではこれま  
でに S.6005 と羽 25 にも確認されているが、年代の特定には至っ  
ていない。
- (5) P.4988 R：（莊子殘卷）  
V：（大目乾連冥間救母變文）  
首題：闕  
尾題：闕  
存：34行
- (6) BD00876（北京 7707、盈 76）  
R：佛說無量壽宗要經  
識語：田廣談  
V：大目犍連變文  
首題：大目犍連變文  
尾題：闕  
存：132行  
寫成年代：977年  
識語：太平興國二年歲在丁丑潤六月五日顯德寺學仕郎楊願受，一  
人恩微（惟），發願作福，盡寫此目連變一卷，後同釋迦牟尼佛嘗會  
彌勒生作佛爲定。後有衆生，同發信心，寫盡目連變者，同池（持）  
願力，莫墮三途。
- (7) BD04085（北京 8445、麗 85）  
R：（大目乾連冥間救母變文）  
首題：闕  
尾題：闕  
存：63行  
V：（殘唐律）

(8) BD03789 (北京 8443、霜 89)

R：(大目乾連冥間救母變文)

首題：闕

尾題：闕

存：62 行

V：(殘變文)

(9) S.3704 R：(大目乾連冥間救母變文)

首題：闕

尾題：闕

存：25 行

(10) 石谷風 69

R：(大目乾連冥間救母變文)

首題：闕

尾題：闕

存：12 行

參考：『晉魏隋唐殘墨』、安徽美術出版社、1992 年、69 頁

(11) 石谷風 70

R：(大目乾連冥間救母變文)

首題：闕

尾題：闕

存：13 行

參考：『晉魏隋唐殘墨』、安徽美術出版社、1992 年、70 頁

(12) 石谷風 71

R：(大目乾連冥間救母變文)

首題：闕

尾題：闕

存：4 行

參考：『晉魏隋唐殘墨』、安徽美術出版社、1992 年、71 頁

(13) 杏雨書屋羽 19

R：(大目乾連冥間救母變文)

首題：闕

尾題：闕

存：42 行

(14) 杏雨書屋羽 71

R：(大目乾連冥間救母變文)

首題：闕

尾題：闕

存：102 行

(15) P.2249 R：大般若波羅蜜多經卷第二三三

V：(習字斷片「大目乾連」、「往生淨土經」、「開蒙要訓」、(雇男契書)、(落書「太公家教」、「王梵志」題目)、悉達太子修道因緣

識語：壬午年正月一日慈惠鄉百姓康保住(雇男契書)(922年?)

寫成年代：922年前後。

參考：題名 1 行。

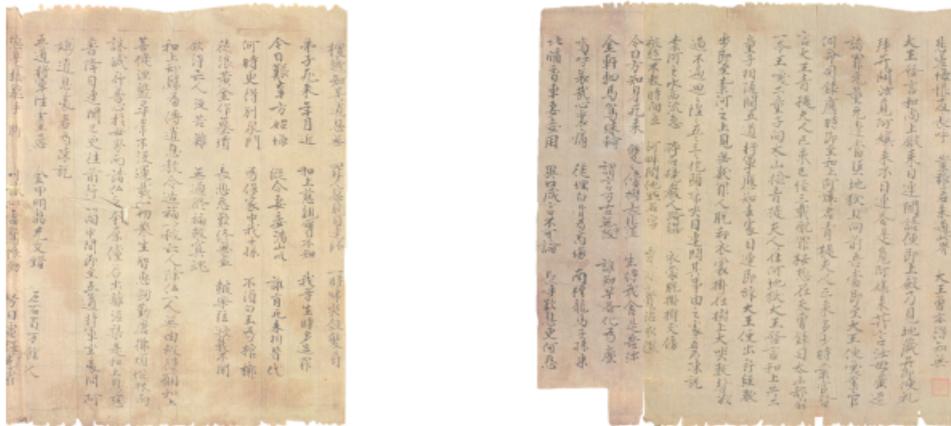
現在、『大目乾連冥間救母變文』系統の寫本と確認されるのは以上の 15 点であるが、このうちの (15) は題名のみで本文の記載はない。

これらを詳細に比較することによって、幾つかの事柄が明確になる。まず、これらのうちの幾つかの寫本が綴合でき、もと一つの寫本であったと確認できることである。

本文の記載のある 14 寫本のうち、P.4988 と羽 19 が綴合できることについてはすでに指摘が有る。この点については張涌泉氏がしばしば言及されている<sup>6</sup>。

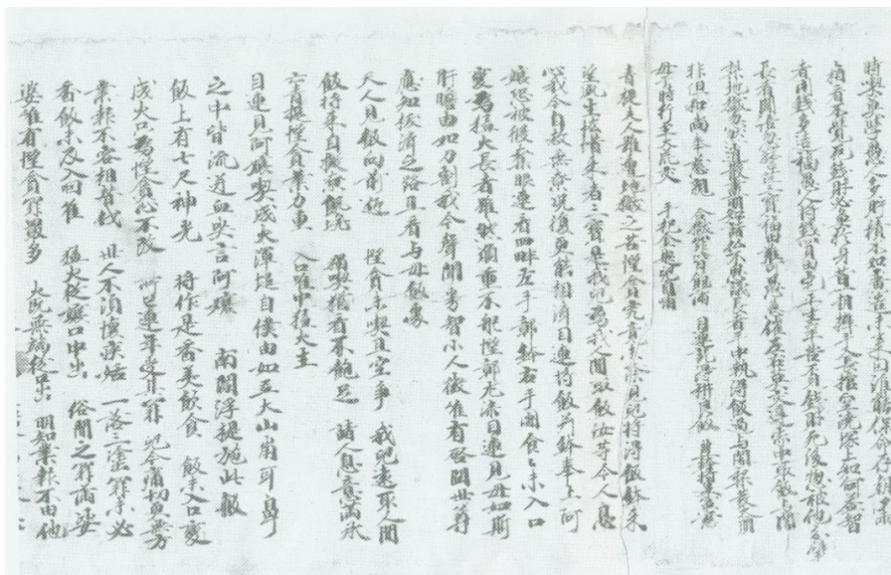
他にも、石谷風本として『晉魏隋唐殘墨』に掲載されている 69 頁、70 頁、71 頁に掲載されている三種の目連變文は、實は元の寫本が裁斷されたものであることがわかる。その順番としては、71 頁に掲載される 4 行が實は 69 頁の後ろの部分を裁斷した部分で、70 頁に掲載される部分はさらにその後ろの部分となる。寫眞にはその前後は寫されていないので、全長は不明であるが、圖録で見ると 70 頁の左右兩脇にはそれぞれ白い背景が見えている部分が有り、兩側が裁斷されているものともみられる。71 頁で見られるように「北牖香車妻妾用。異口咸言不可論，長呼嘆息更何怨。」の一行の後ろは明らかに裁斷された跡が見られることから、日本の手鑑、古筆切れのように短く裁斷されていると推測される。

<sup>6</sup>張涌泉「敦煌變文整理作業の展望」、『唱導、講經と文學——第 2 回東アジア宗教文獻國際研究集會報告書』、廣島大學敦煌學プロジェクト研究センター編、2013 年、355-367 頁。



石谷風本（左から『晉魏隋唐殘墨』70頁と71頁+69頁部分）

またこの他にも、BD04085（北京8445、麗85）の後ろにBD03789（北京8443、霜89）が接續することが確認される。この北京8443は變文では珍しい「二卷本」の變文であり、數日かけて講じられる講經、俗講との関係が考えられる興味深い變文である。ただ、BD03789のみでは斷卷で狀況が判りにくかったのであるが、BD04085と綴合されることにより、「二卷本」の狀況がより分かりやすくなったと考えられるのである。



中國國家圖書館藏 BD04085 + BD03789

さらにこれら石谷風藏の3點およびBD04085 + BD03789の2寫本は、書體など寫眞より見た狀況から杏雨書屋羽71とともに極めてよく似た特徴を示しており、

同一の寫本であった可能性が指摘でき、「二卷」本の變文の全體像の復元に迫ることができるのである。

これらの寫本が同一の寫本であったとする推測は、他の『大目乾連冥間救母變文』寫本と誤字、脱字、遺漏、加筆などの比較を行うことによってより明確に説明をすることができる。この點に關しては、次節でほかの問題と併せて詳しく見ていきたい。

### 第三節 比較對照の結果と書き換えの狀況

まず、これらの寫本を對照して氣づく點は、『大目乾連冥間救母變文』系統の寫本の記述は寫本間での異同が少なく、佛傳故事類で見られたような大幅な書き換えが見られないことである。これらの寫本の識語に見られる書寫年代では、最も古いものがS.2614の「貞明七（921）年」、新しいものはBD00876の「太平興國二（977）年」で、70年以上も大きな書き換えが見られないことになる。音通による假借文字のほか誤字までも踏襲されている箇所があり、10世紀初めのころまでには定式化されて流通していたことを知ることができる。他の敦煌の講唱體寫本ではこのようなケースは稀で、他の講唱體よりも早い時期に定式化され廣まったことが考えられる。

以下に、細部における狀況について、音通による假借字や誤記、加筆や遺漏の狀況から各寫本の關係を數點に分けて見てみたい。

（一）すべての寫本を通じて同じ誤記が見られること。

すべての例を擧げることにはできないが、例えば前半の部分では、以下のような例が見られている。

尓時世尊報目連曰：「汝母已落阿鼻，見受諸苦。汝雖位登聖果，知欲何爲。若非十方衆僧解下（夏）脱之日，已（以）衆力乃可救之。

（P.3485のみ「下」字の後ろに「勝」字あり。）

「已」字はしばしば「以」の代わりに充てられる字であるが、「下」字は夏安吾を指す「夏」とするべきで、音通による當て字であり、該當部分を記載する敦煌本の全ての寫本が同様の誤記を踏襲しているのである。

また後半の部分でも、以下のような現存寫本に共通する誤記が見られる。

目連見母却入地獄，切骨傷心，哽噎聲嘶，遂乃舉身自撲，由（猶）如五太山崩，七孔之中皆流迸血。良久而死，復乃重甦，兩手按地起來，政

頓衣裳，騰空往至世尊處。

（「却入地獄」の句のみ異動有り。BD04085 + BD03789 は「地獄」の2字なし、P.2319 は「却入地獄」とする。）

「猶如」は、「由如」と書かれることは多いが、「政頓」は「整頓」と校すべき字である。

こうしたことは、敦煌本に残されるすべての寫本（少なくとも現存するすべての寫本）の祖本が同じであったことを意味している。この時代に敦煌に存在したすべての文獻がここにあると断定できるわけではないのであくまでも推測の域を出ないが、敦煌のほかの講唱體に先んじて定式化されていることからみると、あるいは外部ですでに定式化された『大目乾連冥間救母變文』が存在し、それが敦煌に流入して流行したとみるのが良いのかもしれない。

長文の韻文を挟むいわゆる講唱體變文は、筆者がかつて行った變文寫本の調査結果などから、少なくとも敦煌においては10世紀の初めころ流行し始めたもので、類書や故事略要本などを基にして、當時宗教儀禮の中で流行していた讚美歌、淨土讚などを法會の次第に合わせて組み立て作られていったものであることが明らかになっている。その具体的な例では、『悉達太子修道因緣』などの佛傳故事變文類が最も寫本が多く残されているのでその變化の狀況を把握しやすく、920年代頃から徐々に變化して定式化し、佛教儀禮に用いる押座文、讚文などを取り入れ、また挿入する位置を變えつつ發展し、10世紀半ばころになって『太子成道經』という「經」の名をつけた定型が完成したことがわかっている。また同じ目連の故事でも、10世紀後半にかけて『孟蘭盆經講經文』、『目連變文』、『目連緣起』のような様々なバリエーションの講唱體變文が残され、BD04108（北京8719、水8）のような變文作成中の稿本が見られるなど、敦煌において變文が作成されたことが知られている。

そのような敦煌での講唱活動が行われる中で、このような敦煌での流行の最早期にはすでに定式化していた『大目乾連冥間救母變文』が敦煌にもたらされたという事實から、敦煌以外でもこの時代には同様の講唱文學が流行していたことがわかり、また敦煌外部でも淨土讚を組み合わせた形で講唱體が發展しつつあったことが確認できる譯である。

## （二）二系統に分けられる可能性。

上に見てきた前提で、さらに詳細に對照させると、細かく言えば、石谷風本、羽71、BD04085 + BD03789の三種と、その他のS.2614などのグループとが大きく二系統に分けられることがわかる。

例えば、石谷風本、羽 71、BD04085 + BD03789 のそれぞれと、他の系統を比べた場合、例えば石谷風本と他の系統では以下のような違いが見られている。

石谷風本	S.2614 他
大王啓言和尚上殿來，目連聞語便即上殿，乃見地藏菩薩，即便禮拜。菩薩問：「汝覓阿孃來不？」	目連言訖，大王便喚上殿，乃見地藏菩薩，便即禮拜。「汝覓阿孃來？」

次に羽 71 で見てみよう。

羽 71	S.2614 他
目連承佛威力，騰身向上，急如風箭。須臾之間，即至阿鼻地獄。空中且見五十箇牛頭馬頭，夜叉羅刹，身如劍樹，口似血盆，聲如雷鳴，眼如掣電，上向天曹當直。逢著目連，遙報言：「和尚莫來，不是好道，此是地獄之路。西邊黑烟之中，惣是獄中毒氣，吸著，和尚化爲粉碎。	目連承(承)佛威力，騰身向下，急如風箭。須臾之間，即至阿鼻地獄。空中見五十箇牛頭馬腦，羅刹夜叉，牙如劍樹，口似血盆，聲如雷鳴，眼如掣電，向天曹當直。逢著目連，遙報言：「和尚莫來，此間不是好道，此是地獄之路。西邊黑煙之中，惣是獄中毒氣，吸着，和尚化爲灰塵處。 (「此間」、P.2319 は「此」字なし。)

最後に BD04085 + BD03789 と他系統を比較すると以下ようになる。

BD04085 + BD03789	S.2614 他
目連行至城中，次第訖飯，到長者門前。見非乞飯，盤問逗留之處：「和尚且齋時已過，食時已過，訖飯將欲何爲？」目連啓言	目連辭母，擲鉢騰空，須臾之間，即到王舍城中，次第乞飯，行到長者門前。長者見目連非時乞食，盤問逗留之處：「和尚且齋已過，食時已過，乞飯將用何爲？」目連啓言。(P.2319 は「食時已過」の句なし。)

このような例は、他にも数多く見られるが、以下は省略する。

以上のように微細ではあるが、強いて言えば二系統に分かれて流布したとみることができるのである。ここで、前章で取り上げた綴合について戻ってみると、先に述べた書體の類似に加えて、こうした S.2614 等の系統とは異なるという共通点もまた、これらの寫本が同一であったとの假説を証明するための一證據となるのである。

なお、ここでは取り上げなかったが P.4988+羽 19 もまた石谷風本などに近い特徴が見られ、かつ S.2614 等の系統とも近いという、両系統の中間的な様相を見せている点もここに一應指摘しておきたい。

では、これらの何れの系統がより外來の祖型に近いか、つまり外來の可能性はあるかという問題が残るが、この点については、現時点では筆者は石谷風本等の

系統が古い形を残しているものと考えている。なぜなら、もう一つの系統の中で、「貞明七（921）年」の識語を残し、かつ誤字等も他本と比べて比較的少ない最早期と見られている S.2614 は、實は「受罪之人仍未出」から「目連悶絕僻 [地]，良久氣通，漸漸前行，即逢守道羅刹問處」の計 6 行分の記載が漏れていて、後に寫本を切って一紙を継ぎ足して書き加えているのである。敦煌に現存する全寫本から見ても、この部分を残すのは明らかに後代に寫された P.2319 以外には羽 71 にのみこの記載が残されているのである。

### （三）韻文を省略する P.2319 の問題。

S.2614 と同系統ではあるが、韻文部分を大きく省略し、かつ本文にも若干手が加えられているのが P.2319 である。

P.2319 は冒頭の題目の下に「其偈子，每械三兩句，後『云云』是…」との識語が残されている。この識語の意味は、當初極めてわかりにくく感じるが、寫本全體を読み解けばその意味は明らかで、『大目乾連冥間救母變文』の長い韻文を大きく削除、整理しており、その韻文の末尾には省略を意味する「云云」の句が記されており（中には韻文の省略されていない箇所にも記されている例もあるが）、この識語では、その本文中の韻文が三、四句に抄録されていることを説明するものである。この P.2319 は S.2614 よりは後の文獻と見られ、次章にも言うような定式化された後の寫本であるとみられるので、抄録本であることを明示するためにこの文句が書かれたのであろう。ちなみに、誤記や加筆、遺漏などから見ても、この寫本は S.2614 以降、他の寫本が作られていく過程では比較的早い時期の寫本ではないかとみられる。

なお、ここで一つ注目しておきたいのは、この變文中では當時の人物に據って韻文部分が「偈」あるいは「偈子」と稱されていたことを知り得ることである。「偈」とは梵語 *gāthā* の音譯語で、伽陀とも音譯される。佛の教えを韻文で説いたもので、漢譯では頌、或いは詩とも譯されるものである。本來はその文體には規則性があったが、變文の流行し始めた 10 世紀頃は、敦煌ばかりではなくほかの地域においても淨土系の五會念佛法事とともに讚文の歌唱が流行しており、まさにその讚文もまた偈とよばれるようになっていたのである。こうした點から考えると、變文で歌われていた韻文が、五會念佛法事などで歌われる讚文から發展したとする筆者の考えを證明してくれる資料の一つということになるのである。

この法事で用いられる讚文は、代宗から徳宗時代に活躍した法照のころには、韻や平仄を整えた盛唐以降の詩の形式に合わせて作られるようになったことは、『淨土五會念佛誦經觀行儀』、『淨土五會念佛略法事儀讚』に残される多くの讚文などから見ても明らかである。そして、實際の儀禮に合わせるよう加工され、儀禮

の初めの「押座」の作法で歌う押座文などとしても使われたことは筆者もすでに述べたことがある。時に民間では「梵唄」とも同じものとして理解されていたようで、ロシア藏Φ109では「押座文」の題名の下に「作梵而唱（梵〔唄〕として歌え）」との注記が見られていることはよく知られている。

このように考えると、變文中の韻文も、口頭傳承等の中で變化しつつしだいに定式化されたと考える中で、原型となる韻文が如何に作られたのか、流布されて書き換えられる以前は文體を整えて作られていたのではないかとの考えに至る。次節では、『大目乾連冥間救母變文』の韻文の文體分析から、これらの韻文が作られた過程について考えてみたい。

#### 第四節 『大目乾連冥間救母變文』中の韻文と文體

『大目乾連冥間救母變文』の韻文部分は膨大なので、ここでは初めの韻文部分を例に取り上げて分析しておきたい。

「二四不同二六對」、「一三五不論」などによって、偶數句のみの平仄をそれぞれ○と●で表したのが以下である。

①×羅卜自從父母沒，禮泣三周復制畢，聞樂不樂損形容，食旨不甘傷筋（筋）骨。  
（沒、畢、骨は入聲）

②×聞道如來在鹿苑（苑），一切人天皆憊恤，我今學道覓如來，往詣雙林而問佛。  
（恤、佛は入聲）

③△尔時佛自便逡巡，稽首和尚兩足尊，左右摩訶釋梵眾，東西大將散諸神。  
（神は眞韻、尊は平聲元韻）

④○看（胸）前萬字頗黎色，項後圓光像月輪，欲知百寶千花上，恰似天邊五色雲。  
（輪は眞韻、雲は文韻）

⑤△弟子凡愚居五〔欲〕，不能捨離去貪嗔，直爲平生罪業重，殃及慈母入泉〔門〕。  
（嗔は眞韻、泉は先韻。門は元韻）

⑥×只恐無常相逼迫，苦海沈淪生死津，願佛慈悲度弟子，學道專心報二親。  
（津、親は眞韻）

⑦△世尊當聞羅卜說，知其正直不心邪，屈指先論四諦法，後聞應當沒七遮。  
（邪、遮は麻韻）

⑧△縱令積寶凌雲漢，不及交人鬻出家，恰似盲龜遇浮木，由如大火出蓮花。

炎○炎○火○宅○難○逃○避○， 滔○滔○苦○海○闊○無○邊○。 (家、花は麻韻。邊は先韻)

⑨○直○爲○眾○生○分○別○故○， 如○來○所○已○(以)立○三○車○。 佛○喚○阿○難○而○剃○髮○， 衣○裳○變○化○作○袈○裟○。  
(車は麻韻、袈は歌韻)

⑩ 登○時○證○得○阿○羅○漢○。 後○受○婆○羅○提○木○叉○。 羅○卜○當○時○在○佛○前○， 金○爐○怕○怕○起○香○煙○，  
六○種○瓊○林○動○大○地○， 四○花○標○樣○葉○清○天○。 千○般○錦○繡○補○(鋪)床○座○， 萬○道○珠○幡○空○裏○  
玄○(懸)○，  
佛○自○稱○言○我○弟○〔子〕， 號○曰○神○通○大○目○連○。 (又は麻韻、前、煙、天、玄、連は先韻)

○平仄の組み合わせが合っているもの

△：平仄が合わない文字が2字以内のもの

×：平仄が合わないもの

一見して、四句で換韻しており、平聲の麻韻と歌韻、先韻で押韻するものが多く、近體詩に近いもののようにも見える。

ただ、①、②では入聲で押韻し、平仄の組み合わせも全く合わないが、仄聲を多く当てている點が逆に特徴的である。これにより、暗く低い韻律となるのであるが、これに類する韻文、讚文に、マニ教徒が使用したとされる敦煌本『下部讚』があり、また、變文でも異教徒との法術争いを主題とする『降魔變文』に多く見られる韻律であるという點は興味深い。こうした點から、この句が後で意圖的に書き加えられたものと假定すると、本來は「尔時佛自便逡巡，稽首和尚兩足尊，左右摩訶釋梵衆，東西大將散支(諸)神。」に始まる經典などの書き出しにも近い韻文であったと考えられ、初めの句として自然な形のように見えるのではないだろうか。

このように、後から加えられたり、書き換えられたりした句があると推定して改めてみると、⑧や⑩のように、句數や韻が合わない部分を考えるうえでも参考になると思われる。例えば、⑧では「炎炎火宅難逃避，滔滔苦海闊無邊，」の句が講唱の場での誇張や、追加説明として後で加えられたものと考えれば、本來的には、當時において人々が朗讀するときなどに既に慣れ親しんでいた韻律に合わせて作られていたものと理解することができるのではないか。

⑩の部分は、初めの4句と次の4句ともに平仄が合っているようであり、初めの4句では韻が揃わない。それでいて、後ろの6句では「二四不同二六對」として先韻を韻としている句が多いのは偶然とは思われない。やはり何らかの後の加工が考えられるのである。

こうした、韻文の書き換えによる平仄の變化(亂れ)は、敦煌本では淨土讚などの讚文類にも多く例を見つけることができる。本來は精緻に作られた韻文が、平

仄の効果があまり表れない歌唱あるいは講唱という實用の中で書き換えられることも自然なことではないだろうか。

## 第五節 小結

本稿の『大目乾連冥間救母變文』寫本の調査によってわかったことは以下の數點である。

(一) 今日知られている 15 點の寫本のうち、幾つかの寫本が綴合でき、またあるいは同一の寫本であったことを確認できる。このうち、安徽省の書家でもある石谷風が黃賓虹の紹介で方子才から購入したとされる 3 點の『大目乾連冥間救母變文』斷簡が<sup>7</sup>、同一の寫本から古筆切れのように裁斷されたものであること、そしてそれと杏雨書屋本羽 71 と中國國家圖書館藏本の 2 點がもと同一の寫本であったことを考えると、李盛鐸あるいはその家族がここに關っていたことが想像され、外部に流出した部分には古書肆から觀賞用の古筆切れとして裁斷され、分散して流出したという悲しむべき経緯を読み解くことができる。

(二) 文字を對照表により詳細に比較することにより、『大目乾連冥間救母變文』の系統が、敦煌での講唱體變文流行の初期に、すでに整理された形で外部からもたらされた可能性が高いことを確認できる。具體的には、S.2614 寫本には 921 年の識語が見られており、10 世紀の初めころにはすでに定式化された講唱體文獻となっていたことを表しているのである。敦煌ではそれに並ぶ時代の定式化された講唱體文獻變文はみられず、敦煌で流行した最早期の講唱體變文と見ることができるのである。こうしたことは『本事詩』に白居易と張祜の『長恨歌』にまつわる會話の中で「目連變」と比較する記述が見られることから<sup>8</sup>、目連の變文がすでに中土において廣まっていたとみられるわけで、そのうちの一つが敦煌にもたらされて、敦煌での流行したものと見ることができるのである。『大目乾連冥間救母變文』に見られるような、長文の韻文を挟む講唱體變文は、他の變文寫本などから見て、敦煌では 10 世紀の初めによく流行し始めたもので、『悉達太子修道因緣』、などの佛傳故事變文類では、920 年代に見られる寫本あたりから、徐々に佛教儀禮の讚文などを取り入れつつ變化して 10 世紀半ばころになってようやく『太子成道經』という形式にまとめられたことがわかっている。同じ目連の故事でも、10 世紀後半にかけて様々なバリエーションの講唱體變文が敦煌において作成され

<sup>7</sup>石谷風『魏晉隋唐殘墨』「前言」、安徽美術出版社、1992 年。

<sup>8</sup>『本事詩』卷第七：「張（祜）頓首微笑，仰而答曰：「祜亦嘗記得舍人目連變。」白（居易）曰：「何也？」祜曰：「『上窮碧落下黃泉，兩處茫茫皆不見。』非目連變何邪？」遂與歡宴竟日。」

たことがわかる。このように見ると、『大目乾連冥間救母變文』がもたらされたことによる敦煌での講唱體變文流行の様相を推測することができるのである。なお、この時代には、同じように浄土系の讚文をとまなう十王經類が、やはり改變をしながら經典化されていく時代でもある。様々な語り物や俗人を対象とする佛教儀禮から、藝能的エッセンスを抽出しながら徐々にまとめられ經典化されていくという、この時代の一つの特徴でもあるようである。単純に考えれば、政治的あるいは宗教的に規範化が強化される時期にこうした經典化と目録整理が行われるわけだが、この時代にいかなる作用が働いたかについては別稿でまた論じてみたいと思う。

(三) また、こうした敦煌での講唱體の流行の中で、一旦は規範化、經典化されている『大目乾連冥間救母變文』が、使用の中で偈文を加筆したとみられる部分、あるいは逆に省略型が発生していることがわかり、(二)とは逆の經典からの改變という方向が現れている。この点については、本稿では問題提起に留め、(二)とともに別稿で論じたい。ただ、ここで言えることはこうしたことは中土での独特な經典の扱われ方であるということである。こうした經典を改變することへの抵抗感の希薄さは、經典の略要本を作成する行爲とも繋がりを感じる。

ハルオ・シラネ氏はかつてこのような語り物文學が文面化され「定式化」していく過程を、カノン化（聖典化）として論じたことがある<sup>9</sup>。ただ、敦煌の説話文獻からこのような経緯を読み解くと、シラネ氏の言うような日本や歐米の文學とは異なる部分が見られていて興味深い。漢字漢語文化圏の場合、王朝が變わることにより、宗教的意圖よりも政治的意圖を中心にたびたび規範が改められ書籍が整理される。そうした中で、膨大な書籍を検索するなどの目的から、規範化された文獻からの内容の抽出により資料集、類書のような略要本が作られ、それらの略要本からまた口頭傳承などを経てまた成書し、規範化を受けるといった傳承の繰り返しが存在するともいえる。

(四) 『大目乾連冥間救母變文』が、敦煌にもたらされた時にはすでに定式化していたものであった可能性についてはすでに(一)でも述べたが、それ以前の成立の過程を検討してみると、その韻文部分にはその原型として押韻、平仄まで整えた近體詩がもととなっていた可能性が指摘できる。口頭による講唱のために、それが次第に加工されて後の形になったものとわかるのである。

以上のように、改めて詳細に『大目乾連冥間救母變文』を検討すると、まだまだ様々な問題を議論できることがわかる。中でも重要なことは、冒頭にも言うよ

<sup>9</sup>ハルオ・シラネ『越境する日本文學研究 カノン形成・ジェンダー・メディア』、勉誠出版、2009年。

うな、實は變文が「生きた文學」の軌跡として様々な表情を見せているということ、如何に理解するかということと、中國王朝の變遷の中で時として起こる規範化、經典化を文献の繼承の中で如何に捉えるかということではないかと思う。また、こうした觀點に據り初めて變文の本來の姿を見ることができるのではないだろうか。

(作者は廣島大學大學院綜合科學研究科教授)